

東京学芸大学紀要 第三部門 社会科学 第三十九集 昭和六十二年十二月

中国近代史における西郷隆盛像

大石慶二

様

惠存

二〇〇三年一月十八日

中村

敬 義



## 中国近代史における西郷隆盛像

中 村 義  
(歴史学教室)

## はじめに

明治以来、最近までに刊行された人物伝(雑誌掲載を除く)で、一番多く対象にされたのは西郷隆盛のようである。<sup>(1)</sup>庶民的人気秘密は上野公園の銅像にみられる風貌、スタイルと「西郷星」にまで上昇した彼の悲劇的な最後にあると思われる。

いっぽう周知のように、明治・大正・昭和を通して、大西郷、南州翁と呼称され、福沢諭吉、中江兆民、内村鑑三、頭山滿、内田良平等、政治上、思想上、異なる立場から、「敬天愛民」の偉大な人物として讃美と尊敬をうけていた。したがって西郷の歴史的評価は日本近現代史を如何にとらえるかに深くかゝわってくる。<sup>(2)</sup>

ところで、西郷のもつ魅力はたんに日本人をとらえただけでなく、中国人の心をもひきつけていたのである。古くは左宗棠が言及したと聞か、<sup>(3)</sup>残念ながらこの原文は定かでない。時代が下って、一九三六年一月二日の西安事件の立役者楊虎城は、事件直後に、西南戦争が明治政府に反省を求め兵諫であったように、我々のこの事件は蔣介石に対する兵諫であると説明したと伝えられる。<sup>(4)</sup>

また魯迅が晩年、西郷に強い関心を抱いていたという話がある。一九三五年、上海を訪れた増井経夫氏に、魯迅は「東京に帰ったら、西郷隆盛に関する本は何でもいいですから、集めて送ってくださいませんか」

とたのんだそうである。<sup>(5)</sup>しかし、魯迅は翌年亡くなったこともあり、彼の作品中に西郷に関するものはないように思う。

このようなほんの一、二例にすぎないが、いったい西郷のもつ何が中国人の心をひきつけたのであろうか。そこで清末から一九三〇年代にかけて中国における西郷観、西郷像の軌跡をさぐり、西郷が中国近現代史、日中関係史にどのような影をおとっていたかを考察したい。それは中国人の明治維新観でもあり、彼等の一種の日本近代化論ともいえるからである。

## (一) 変法派の西郷論

管見では西郷に言及した古いもの一つは初代駐日公使何如璋の文章である。<sup>(6)</sup>彼は一八七六年冬に日本派遣を命ぜられ、翌年春、出発しようとしたが、西南戦争のために遅れ、九月に北京をたち、上海から日本に向った。彼は次のように言う。

この晩、会館にとまり、会食する。談が乱事(西南戦争)に及ぶ。乱の首領は西郷隆盛で、薩摩の人である。兵を好くし、廢藩の時、勤王を以て陸軍大将となった。「台蕃之役」は西郷がその主謀者である。役が終って征韓論がおこったが、議に敗れ、官を辞して、薩摩に帰り私学を設け、不逞の徒を集めた。今春減賦助奸を名として、

